

青少年地域活動ふるさとを見なおそう 第2集『長門昔ばなし』より

わかみや

若宮さま

むかしの立岩村たていわむらの人たちは、あかつき 暁に星をいただき仕事に行き夕べに月をいただき帰るといっようによく働きました。

今日もひとりの村人が朝もやをついて草刈りに、おき 沖にやって来ました。すがすがし朝の空気を、胸いっぱい吸いながらする仕事は、気もちがよく予定どおり進みました。

朝めし前の仕事でしたからぼつぼつ引きあげようとすると、朝もやの向こうから、ガチャガチャと金物がふれ合うような音が聞えてきます。きこ 「おやつ、なんだろう。」と思って、もやをすかして音のするほうを見ると、よろいを着けたさむらいらしい人が、もやの彼方かなたにかすんで影絵のように立ちつくして、いっこうに動こうとしません。

ふしぎに思いましたが、こわいもの見たさがてつだって、恐る恐る近寄って見ると、まだ童顔の抜けきらない若武者で、近づいた村人に気づいて、にらみつけるようにしていました。

敵でないことがわかると気が抜けたようにぼったりとそのばにたおれてしまいました。

村人がさらに近寄ってみるとあたりいち面の朝露は傷ついたさむらいの血で真赤まっかに染まり、見るもむざんな姿で若武者がたおれています。近づいた村人に向かって息も絶え絶えな若武者は「生きて武士の名をはずかしめることはできない。介かいしゃくをしてくれ。」と片手でおがむようにしています。

村人はとまどいましたが身なりや、その気品は名将の御曹司と思われ、あどけない童顔は自分の子供のようにさえ感じ、あまりのむごたらしさに片手で顔をおおいながら思わず「なむあみだぶつ。」と唱えながら、求められるまゝに、持っていた大鎌で介しゃくしました。

このお話が人情の厚い立岩村たていわむらの人々の間に広がると、若武者の死をあわれみ沖おきの地を戦没の場所として、ここに手厚く葬り村中でお宮を建て「若宮さま」と呼んでお祭りしました。